

資料紹介

豊田市栗狭間遺跡出土の 木製品について

● 武部真木

豊田市南東部の山間地に所在する栗狭間遺跡から出土した木質遺物について紹介する。これらは中世の木材生産に関連する資料と考えられ、山間地の生業の実態を伝える貴重な事例となった。周辺遺跡も含めて調査は継続中であり、今後は具体的な作業環境の復元が期待される。

はじめに

栗狭間遺跡を含む周辺の遺跡が所在する下山地区は、豊田市南東部の山間地にあり、ここでは発掘調査の対象としてあまり選択されることがなかった地形を調査する機会を得た。それは埋没した谷地形や斜面であり、遺構検出を追求するというよりは自然地形の確認と遺物の採取が目的となる調査となった。当然のことながら一般的な集落遺跡と比較しては遺構・遺物とも

に希薄であり生活感に乏しい場所であるが、それでも緩斜面地形では陥穴状の土坑や近代の炭焼窯（炭焼跡）などがほぼすべての遺跡で確認されている。また古代の遺構は多くの地点で検出されており、古くから人々が様々な形で山林の資源利用に関わりを持ってきたことが明らかとなってきた。未だ調査の途中段階ではあるが、山間地の生業に関する資料の一つとして、出土した特徴的な木質遺物について紹介しておきたい。

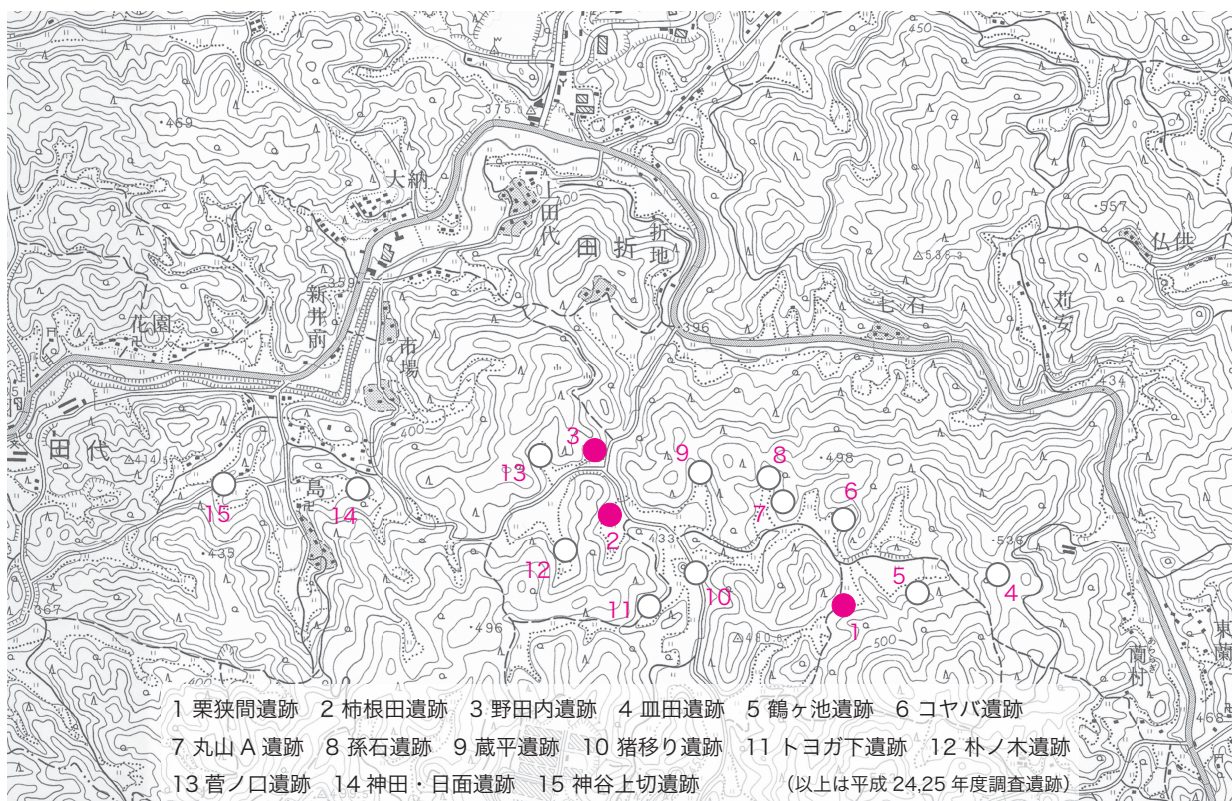


図1 栗狭間遺跡の位置と周辺の調査遺跡 (1/25,000 国土地理院「大沼」を改変した)

栗狭間遺跡の概要

遺跡が所在する豊田市下山代町は、岡崎市と接する豊田市南東部の山間地に位置する。2005年に豊田市に編入された旧下山村であり、町内を流れる郡界川は旧東加茂郡・額田郡の境界でもあった。現在はこの川に沿う盆地状の地形に豊田市松平と新城方面を結ぶ国道301号が通り、宅地、耕作地がみられる。

ここに大規模な研究開発施設の建設が計画されたことから、平成23年度より愛知県埋蔵文化財調査センター（以下調査センター）と公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が継続して調査を行っている。

下山地区の開発エリア内の遺跡の多くは、郡界川支流の沖川に沿って分布がみられる（図1）。これらの遺跡全体では旧石器時代、縄文時代（草創期・早期・前期・中期後半～後期前半・晩期）の遺物、9世紀後半を中心とした平安時代、中世、近世、近・現代の遺構・遺物が

検出されている。

栗狭間遺跡については、平成24,25年度にかけて当埋文センターが合計6,120㎡の面積の調査を行い（図2）、さらに継続調査が予定されている。調査範囲は標高約470mの丘陵斜面地から標高460m前後の谷などの地形が含まれており、検出される遺構は平面・断面いずれもプランが不明瞭なものが多く、人為的なものか判断が難しい。それでも埋没した自然流路下層では多量のドングリを含む土坑状の落ち込み数基が確認されたほか、斜面地形では陥穴と想定される特徴的な土坑と近・現代の炭焼窯（炭焼跡）などが検出されている。また流路跡など旧地形の確認を行う過程では、旧石器時代、縄文時代（早期・前期・晩期）、平安時代、鎌倉・室町時代の遺物が検出されるなど、断続的かつ小規模ながらも周辺での活動の痕跡が認められる。出土した遺物のほとんどが流れ込み再堆積したものであるため、具体的な景観の復元には直接に結びつかない性格のものであるが、山間地遺跡の希有な調査事例のひとつとして、まずは資料を提示しておきたい。

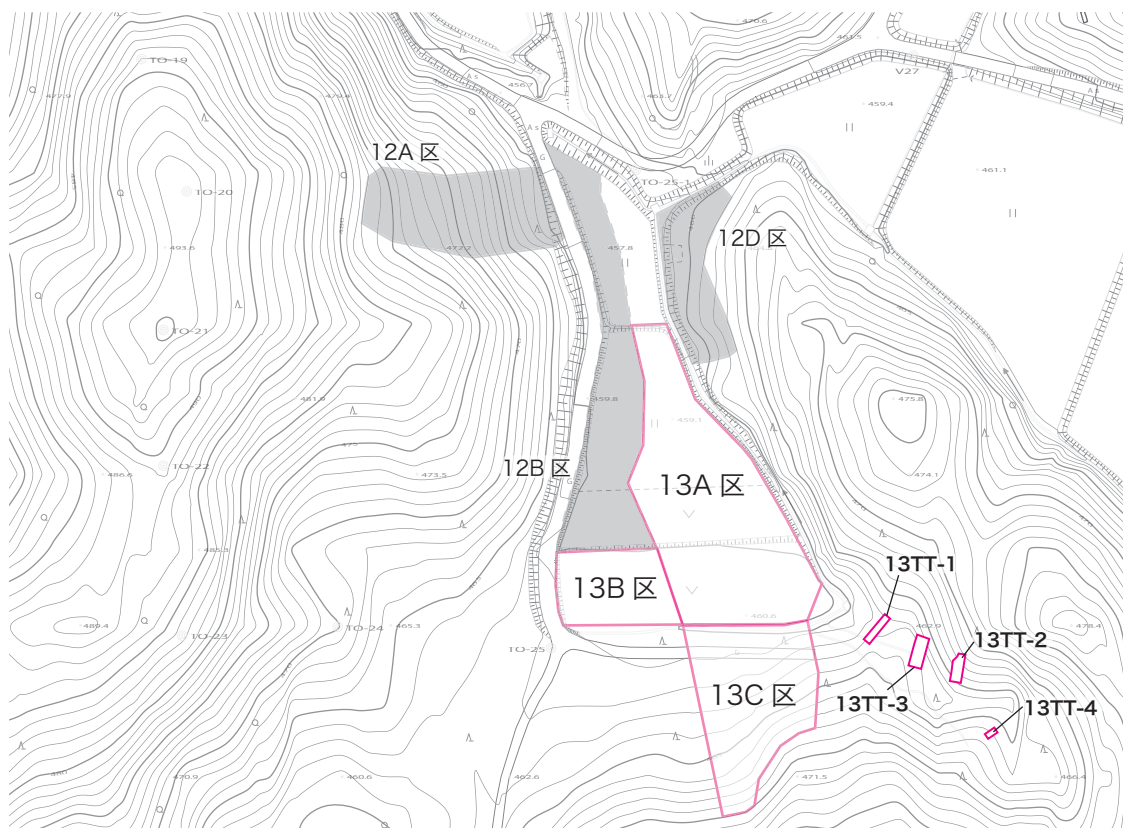


図2 栗狭間遺跡の調査区配置図（1/2000）

資料と出土状況

栗狭間遺跡 13A 区自然流路 (001NR) 出土の木質遺物分布状況を図 3 に示す。様々な木質遺物があるうちで加工痕の有無を資料採集の基準とした。ドットで示されている中には製品の一部と想定されるものをはじめ、切断痕等の加工の痕跡が明瞭なもの、そのほか一部が炭化した自然木枝の燃えさしなどがある。

001NR の堆積層は調査区南東端では深さ 2.0m 近くに達する。上から表土、A 層；褐色シルト、B 層；黒色シルト～砂質シルト、C 層；黒色粘土、D 層；腐植物と粗粒砂の互層となり、風化花崗岩の基盤層に達する。A 層は流路の大半が埋積した後に谷地形の広い範囲を覆う厚さ約 20cm 程度の堆積物であり、自然遺物の木片や植物質を多く含む。近世の陶磁器小片が含まれる。B 層は厚いところで約 1.8m あり、部分的に砂、粘土ブロックが混じることもあり、下位は砂が漸増する傾向がみえる。加工屑か樹皮片か俄には判別できないものの、細かい木片が大量に含まれる。採取した木質遺物の大半はここから出土したものであり、そのほか中世山茶碗・小皿類、陶器小片、砥石、中世無文銭（1 点）などがある。C 層は層厚約 20cm あり、B 層とは明瞭に区分される。C・D 層には灰釉陶器のほか、縄文土器・石器が含まれる。

本稿では、加工痕が明瞭で一定の規格の存在が窺われるもの 3 形態を取上げる。形態上の特徴から調査の段階で抽出したものであり、これらが全ての種類を提示している訳ではないことを予め断っておきたい。

A 類（図 4 - 1 ～ 7）は細長い薄い板状に成形したものをうい、幅の細くなった一端の両側縁を三角形に切り欠いて括れ部をつくる。いわゆる木簡状を呈するものである。先端部から括れ部までの長さは 1.5cm 前後とほぼ一定し、全形は不明ながらも長さは 27cm 程度、括れ部のある側からしだいに幅は広くなり、最大幅は 4.0 ～ 5.0cm、厚さは 0.2 ～ 0.7cm 程度となると思われる。使用痕としては、(2,3) で括れ部の最も幅の狭い箇所周囲と比較して明るい色調を呈しているのが認められるほかは、摩滅の

痕跡なども全くみられない。また墨書は今のところ確認されていない。

B 類（図 5 - 8 ～ 18）は長方形に成形した板材に穿孔が確認できるものである。厚さは 0.4cm 前後、長軸方向が 7.0 ～ 9.0cm 前後のものが多く、10cm を超えるものもある (17,18)。穿孔は 1 カ所で、径は 0.3 ～ 0.6cm 前後、位置は (10) を除くと長軸方向の長さのほぼ半分のところに当たる。欠損の多い短軸方向でもその傾向が窺われることから、基本的には全体の中央付近に穿孔されている可能性が高い。穿孔部と周辺に摩滅の痕跡はみられず、木質の釘状のものが残るものがある (10,18)。(11) は一部が炭化している。

C 類（図 6 - 19 ～ 25）は断面形状が方形となる長い角棒状のものである。断面の一边は 0.5 ～ 1.7cm 程度のものがあり、さらに細分が可能なかもしれない。ほぼ全体が判る資料 (23 ～ 25) では、長さは 93 ～ 96cm、両先端は削られて細くなっている。先端付近は粗雑に削られた加工痕が明瞭に残るもの (21,22) と、比較的丁寧に整形されるか使用により摩滅して断面が円形に近くなったもの (19,20,24) がみられる。また使用痕では、(25) のように先端より 8.0 ～ 15.0cm の範囲一部分が摩滅したように凹み厚みを減じているものがみられるほか、部分的に炭化したもの (20,21) などがある。

以上の 3 つ形態の資料が材として用いた樹種について正確には分析による報告を待ちたいが、いずれもスギ・ヒノキなどの針葉樹を材にしている点が共通している。成形・整形技法は榎目面にしたがって割る程度の簡素なもので、(18) を除くと小口面に刃物による切断痕が認められる程度である。

出土資料と作業環境について

以上の資料が出土した自然流路の上流域で行った範囲確認調査（図 2）において、トレンチ 13TT-1 からはやや厚手の板材 1 点と、13TT-2 から A 類としたものとほぼ同様の厚さの薄板状木片 1 点が出土している。範囲確認調査を行った場所は、広いところで幅 15m 前後となる谷地形であり、周囲に広い平坦地がないこと

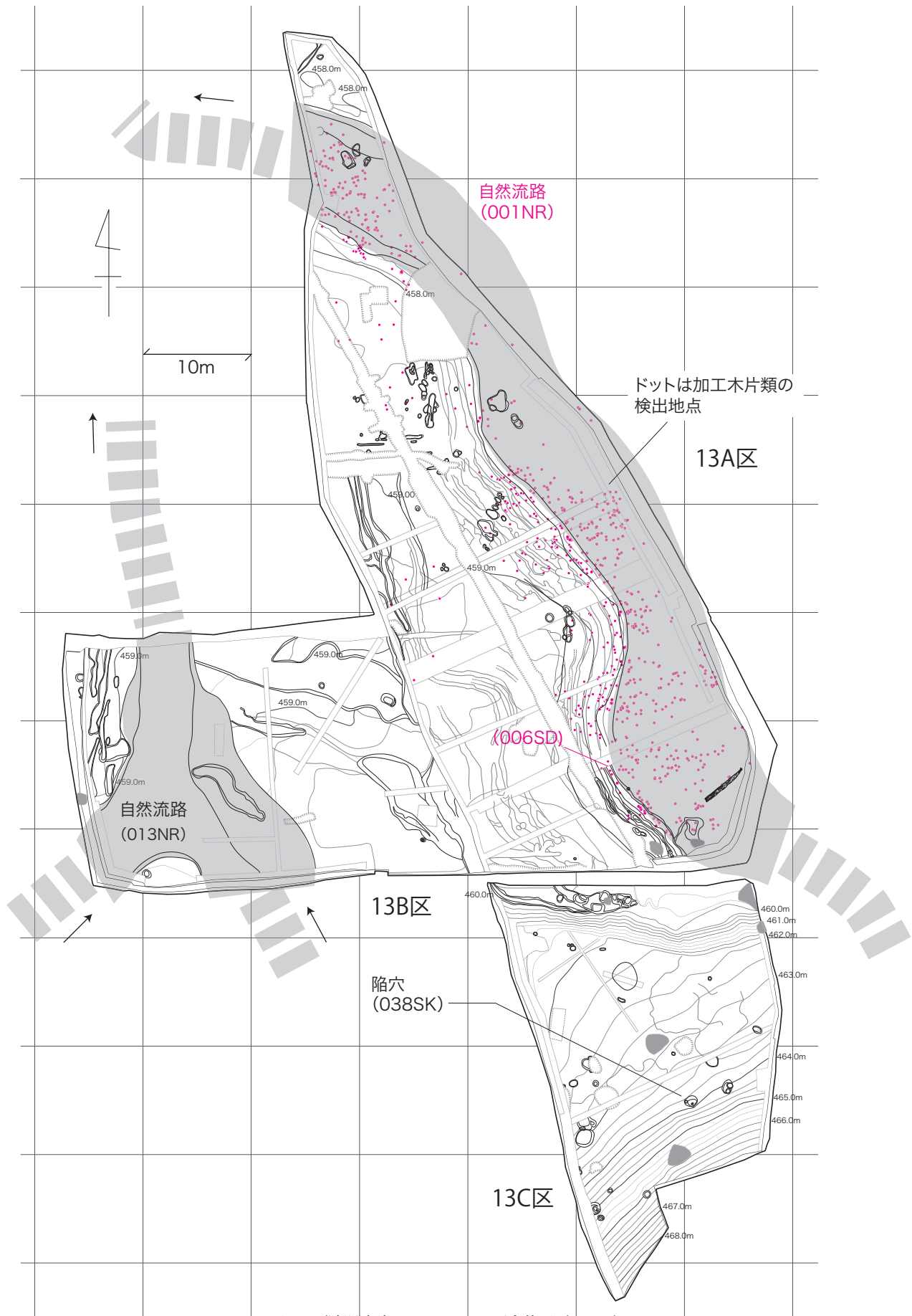


図3 栗狭間遺跡 13 A・B・C区全体図 (1/500)

表1 栗狭間遺跡出土の加工木片

番号	形状	分類	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	備考	調査区	グリッド	遺構	取り上げ番号
1	木筒状	A	*27.1	3.8	0.33~0.36	一部切り欠き,くびれ部 幅1.4	13A	3353	001NRB0層	d-1002
2	木筒状	A	*25.6	4.8	0.35~0.68	くびれ部幅1.2	13A	3353	001NRB0層	d-1188
3	木筒状	A	*19.9	4.7	0.3~0.7	d-1171同一個体,くびれ 部幅1.2	13A	3353	001NRB0層	d-1133,1171
4	木筒状	A	*26.4	*2.5	0.3~0.35		13A	3352	001NRB0層	d-1410
5	木筒状	A	*13.4	*3.0	0.2~0.25		13A	3352	001NRB0層	d-1401
6	木筒状	A	*7.8	*1.9	0.2	一部切り欠き	13A	3051	001NR	d-0784
7	木筒状	A	*18.6	*2.3	0.15~0.43	一部切り欠き	13A	3252	001NR	d-0400
8	長方形板	B	7.5	*4.6	0.3	穿孔	13A	3553	001NR	d-0167
9	長方形板	B	7.1	*3.4	0.4	穿孔	13A	3050	001NR	d-0780
10	長方形板	B	7.9	*4.0	0.4	穿孔,木釘残存	13A	3252	001NRB0層	d-1210
11	長方形板	B	7.1	*5.4	0.9	穿孔,一部炭化	13A	3050	001NR	d-0839
12	長方形板	B	8.1	*6.1	0.35	穿孔,線状の切りキズ	13A	3453	001NRB0層	d-1239
13	長方形厚板	B	8.6	6.6	0.6	穿孔	13A	3453	001NRB0層	d-1270
14	長方形板	B	9.7	*4.5	0.35~0.6	穿孔	13A	3453	001NRB0層	d-1162
15	長方形板	B	8.8	*3.7	0.35	穿孔	13A	3152	001NRB層	d-0956
16	長方形板	B	8.4	*2.5	0.2	穿孔	13A	3252	001NRA層	d-0911
17	長方形板	B	11.8	4.1	0.4	穿孔,片面に円形の日焼け残り	13A	3553	001NR	d-0631
18	長方形板	B	10.2	*6.1	0.9	穿孔,1.75cm木釘残存	13A	3553	001NR	d-0331
19	棒状	C	*47.1		0.9~1.3	先端細い,一部断面円い	13A	3453	001NRB0層	d-1226
20	棒状	C	*35.4		0.5~1.3	先端細い,一部断面円い, 一部炭化	13A	3050	001NR	d-0779
21	棒状	C	*23.0		1.1~1.7	先端細い,一部炭化	13A	3352	001NRB0層	d-1402
22	棒状	C	*24.6		1.4	先端細い	13A	3453	001NRB0層	d-1228
23	棒状	C	95.7		0.6~1.4	両端細く尖る	13A	3050	001NRB層	d-0922
24	棒状	C	*92.8		0.5~1.1	先端細い,一部断面円い	13A	3352	001NRB0層	d-1374
25	棒状	C	93.0		0.5~0.9	両端細く尖る,端部寄り 一部摩滅しくびれあり	13A	3553	006SD	d-0487

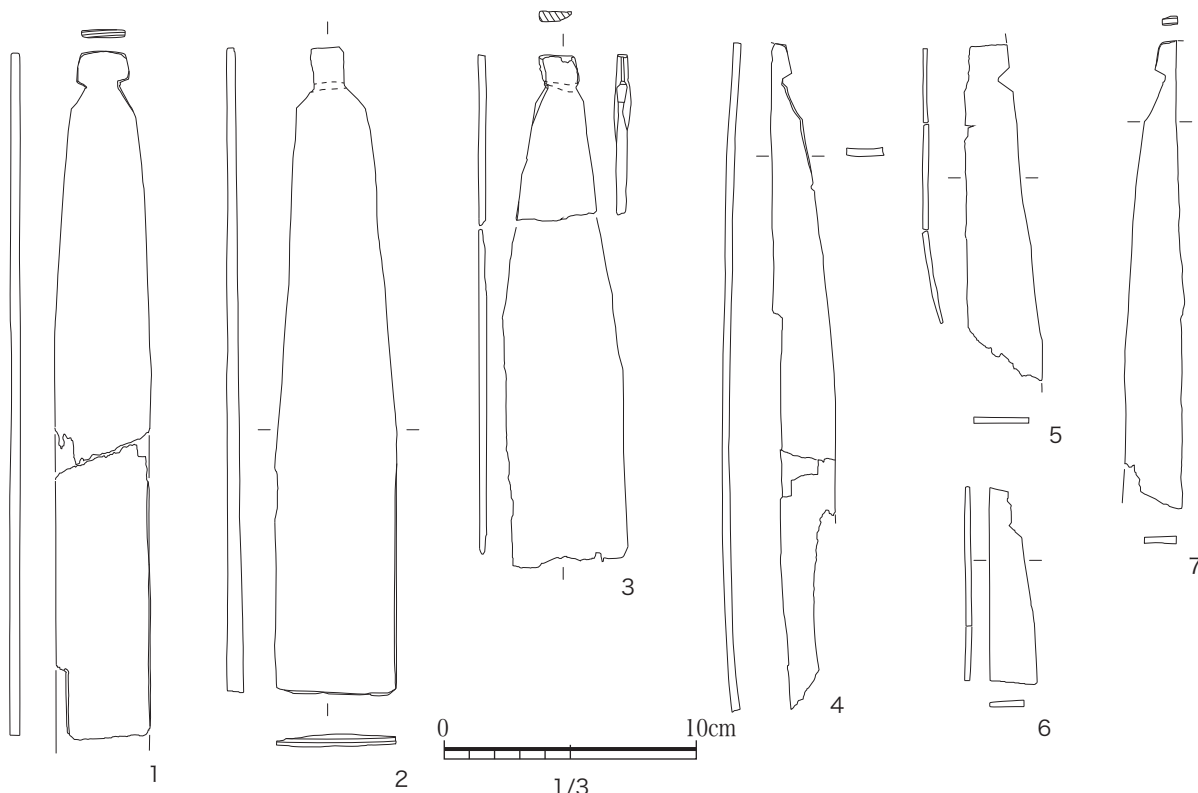


図4 加工木片A類

から、加工作業の場所は谷のさらに上流部、あるいは両脇の尾根上かと推定される。

加工のある木片資料 A～C 類の用途について現段階では不明であるが、少なくともこれらは原材や製作途中の未成品ではなく、完成した製品の可能性が高いと考えられる。001NR 出土遺物では、自然の倒木を除外すると長さ 1m を超える大型のもの、あるいは 5cm 程度の厚みのある板材なども確認されていないため、資料 A～C 類がここでの主要な製品とすれば、比較的小型のものが製作されていたと想定される。また 001NR では貯木場のような施設の痕跡はみられず、規模や水量から運搬に利用できたとは想像しにくい。先述の通り、伐採から製品加工までの作業はさらに上流部で行われた可能性が高く、材料となるスギ・ヒノキのすぐ近くの然程広くない場所を作業スペースとして、

少人数でも搬出可能なサイズ（重量）の製品が作られていたのではないだろうか。

さて、下山地区の周辺の遺跡で出土している加工痕のある木質遺物についてもふれておきたい。平成 24 年度に調査センターが調査を行った柿根田遺跡（12D 区）では、沖川に流れ込む自然流路の合流点近くで長さ約 10m にわたる堰状の遺構が検出された。横木の一つは長さ 6m もの大型の板材であり、矢板を打ち込み固定されている。流路からは墨書もつ灰釉陶器や山茶碗が出土しており、堰の上流側で加工材の集積が検出されている。また、川岸の一部で人工的な石敷の遺構も検出されている。堰の構築時期は古代末から中世前半期と思われる、水位調整のために構築されたと考えられるが、その利用目的に関しては今のところ不明である。また同年度に調査が行われた野田内遺跡の中世の流

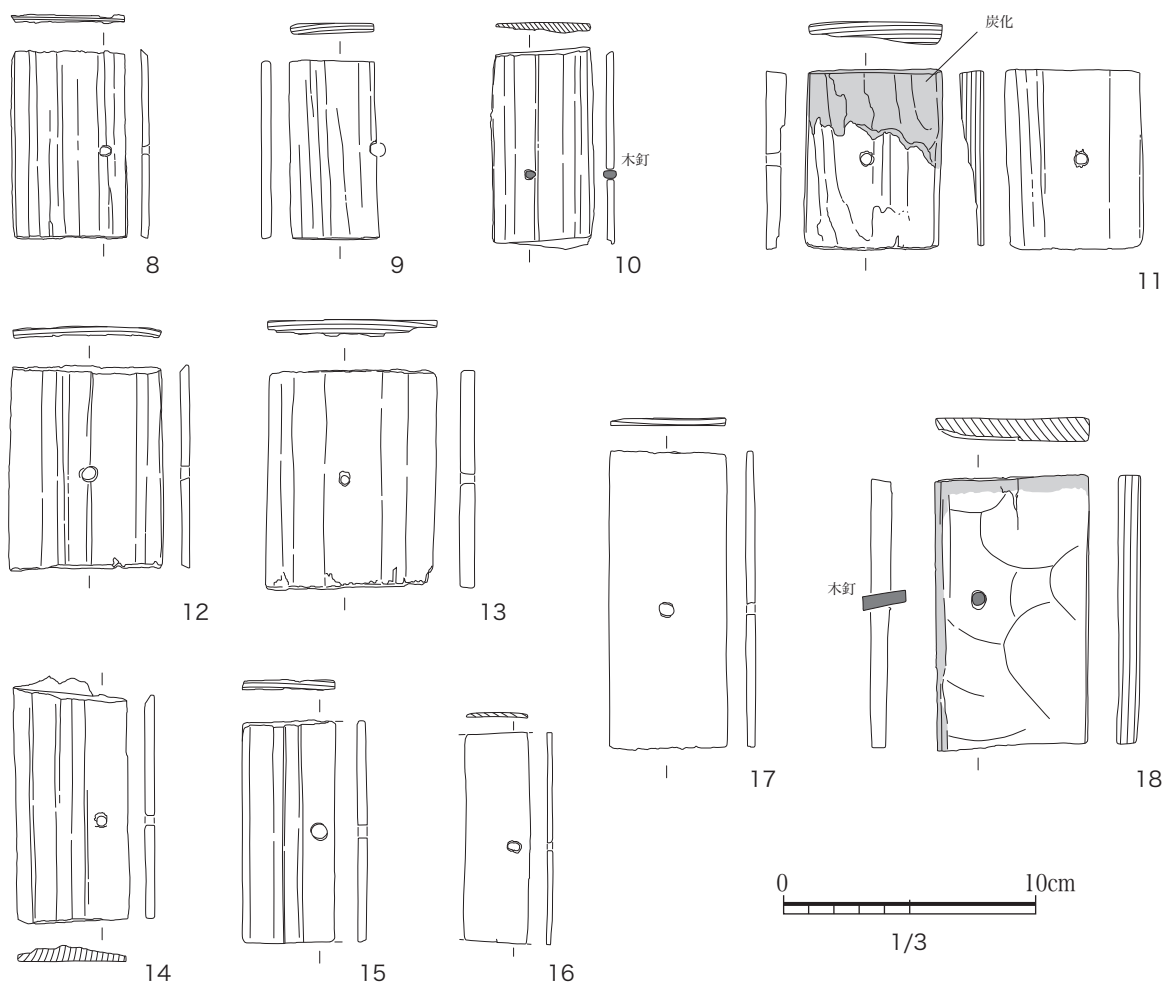


図5 加工木片B類

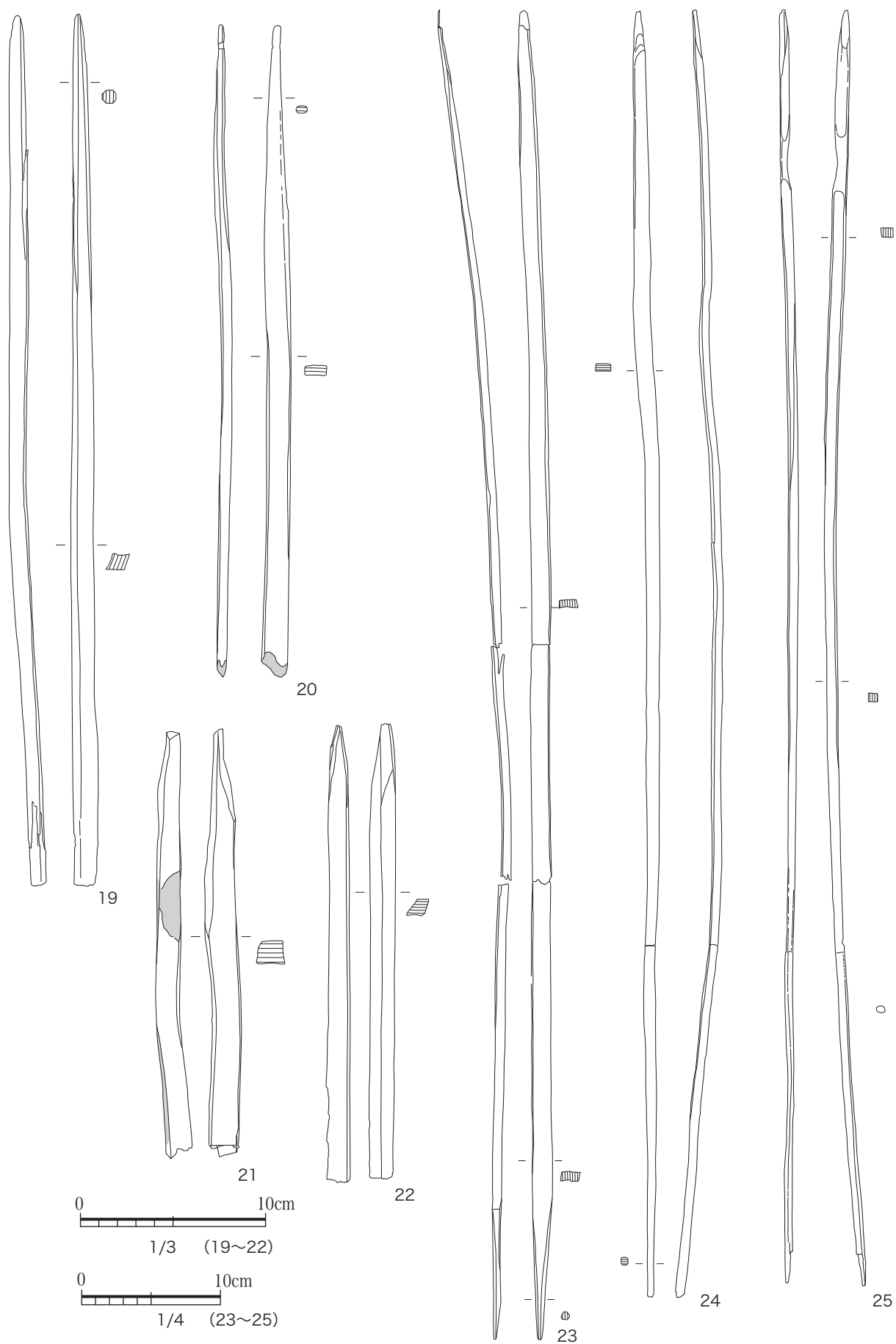


図6 加工木片C類

路跡からは、一方に切り欠きのある木簡状の板材と、B類と類似する穿孔のある板材が1点ずつ出土している*。以上の2遺跡は周辺の遺跡の中では沖川の最も下流域に位置しており、その先は郡界川との合流点に向かって比較的大きな谷を形成している。現在の集落があり、国道の通る盆地への山林北側の出入口のような場所となっている。

そのほか、平成25年度に当埋文センターが調査を行ったトヨガ下遺跡(13A区)では、灰釉陶器碗・皿・小瓶、土師質甕など平安時代の遺物を含む自然流路(O13NR)より少量の板材が出土している**。木製品は1~2cmの厚みをもつ板材であり、ここで製作されたものかは未だ不明であり、搬入された製品の一部かもしれない。栗狭間遺跡出土資料とは様相が少し異なるようである。なお、トヨガ下遺跡は柿根田遺跡の尾根を越えた南側の少し上流側に位置する。

まとめにかえて

下山地区の生業に関連して『東加茂郡下山村誌』に引く『大沼村誌』(姉小路直盛筆)によ

* 下山地区成果報告会資料(平成24年度)および調査担当者への聞き取り

** 下山地区成果報告会資料(平成25年度下半期)、愛知県埋蔵文化財センター『平成25年度年報』

引用・参考文献

下山村 1989『下山村史 資料編 別巻』(1941刊行『東加茂郡下山村史』の復刻)

れば、明治初年頃の農家副業には、炭焼、大工職、木挽職、馬喰職、杣職、商い、綿取り、茶揉みなどがあり、荷駄は九久平、米河内、岡崎等へ運ばれたという。また昭和15年頃の農家副業には養蚕、製炭、養鶏、養豚、養羊、養兎、養山羊、養狸、椎茸の項目が挙げられている。特に産額の大きいものは順に養兎、製炭、養蚕であり、ここには製材等に関連するものはみられない。明治20年代頃には乱伐のため森林は荒廃しており、草刈場を設けるため毎年春に山焼が行われていたという。

現在、遺跡周辺の山林は大半がスギ・ヒノキの植林に覆われている。炭焼窯が構築されたのは植林以前であり、炭焼窯に重複する切株の年輪を数えると、樹齢は70年前後のものがみられる。植生はめまぐるしく変化しており、時代ごとの環境復元のデータを蓄積する作業が求められよう。

今回紹介した出土資料は、おそらく中世段階のものと思われる。当時の木材加工、木製品生産の場の具体的な姿は未だ十分に描けてはおらず、山間地の生業の実態を伝える重要な資料の発見となった。今後は類例の調査をすすめて製品の性格を特定するとともに、継続して行われる周辺遺跡の調査の過程で、関連する遺構・遺物が新たに発見されることを期待している。